

東洋文化研究所紀要 第一六七册  
平成二十七年三月 抜刷

元々清の『尚書』研究と十八世紀日本儒者の『尚書』原典批判

——中井履軒『七經雕題畧(書)』、同収「雕題附言(書)」を題材に——

竹村 英二

# 元々清の『尚書』研究と十八世紀日本儒者の『尚書』原典批判\*

——中井履軒『七經雕題畧(書)』、同収「雕題附言(書)」を題材に——

竹村 英二

はじめに

中井履軒(名一積徳、字一処叔、通称一徳二、一七三二—一八一七)は懷徳堂第二代学主中井斃庵(名一誠之、字一叔貴、一六九三—一七五八)の第二子、第四代学主竹山(名一積善、字一子慶、一七三〇—一八〇四)の弟であり、緻密な経学的業績を残した懷徳堂の重要人物の一人である。武内義雄以来その業績への評価は枚挙に遑がないが、とくに経書への自注の直接書入れである『七經雕題』\*\*、その概要をまとめ別に一群の著作としてまとめた『七經雕題畧』、それらの晩年の集大成である『七經逢原』は彼の生涯をかけ作成された主著群である。

履軒が自身の『雕題畧』緒言において、「新奇を好む」に忙しい徂徠、「故常に安んずる」林家、「剛戾」を好み「物敵」となる専門各々を批判するのは武内義雄などによる指摘があるが、この批判文につづく、「唯平心書を読みて愛憎を新故に生ぜず、深く古経の未だ瞭かならざるを慨きて、聖人の心後世に伸びざるを痛み、憤るが如く悶ゆるが如

元々清の『尚書』研究と十八世紀日本儒者の『尚書』原典批判

く、寝を忘れ食を忘れ、毀譽得喪を度外におき、矻矻鑽攻して老の將に至らんとするを知らず、然る後始めて与に經を論ずべきのみ」との文言も注目すべきであろう。即ち、履軒は三十六歳時に懷德堂を離れ水哉館という私塾をひらき、住まいも転々としながら經学研究に没頭した。懷德堂に「反旗」をひるがえしたわけではないだろうが、動もすれば上に引いた語は、日頃から大坂学界にて華々しく活躍し、或は表立つての論争を好む儒者に対して一定の距離を置き、肅々と經書の研究に没頭することの宣言であったともいえよう。

そしてこの語は、中井履軒という儒者の重要な側面への我々の注意を促そう。即ち、たとえば宋末〜元初の諸儒においては、「一方で事物の理を探究する深入の道」が進められると共に、他方では「博学の風潮」、「古書の真偽を明らかにして正しいものを伝えようとする學術精神」が顕出したごとく、履軒においても、当代の学問の精密化が反映されると同時に殊更彼においてそれが先鋭的に推し進められ、彼自身が、その後半生に隆盛をみた考証学的学問の体現者の一人として現れたのである。

本稿は、懷德堂における履軒の位置づけ、彼の『中庸』重視、或は「朱子学者」としての彼の思想について云々することを意図するものではない<sup>④</sup>。そうではなく、彼が「孔子の功を見るな」しと結果的には遠ざけた「五經」<sup>⑤</sup>の、とくに『書』の研究の「やり方」の微細の検討をつうじて、彼の学問態度、とりわけ原典批判の姿勢の一端を考察することを目的とする。さらにはそれを踏まえ、彼の研究を、西欧における原典批判にも鑑みながら位置づける。

## 1. 履軒の『尚書』研究

履軒は生涯に涉つて經書の研究に専心したが、その方法は、まず既存の經書の版本の上部空欄に自らの注釈を直接書入れ、そのやり方からこの段階の研究を「雕題」と名付けた。易・書・詩・左伝・礼記・論語・孟子の七書においてすめられたこの作業をまとめたのが『七經雕題』である。書き込みが煩雑になるとその概要をまとめた『雕題畧』を編集、これらを晩年に至るまで編集を重ね、集大成したものを、根源に溯る(逢う)との意味合いをこめて「逢原」とした。履軒の『書』研究は『七經雕題』、同『雕題畧』、『七經逢原』におさめられている(『書逢原』は「夏書」のみ)。

『雕題』、同『畧』、『逢原』の執筆順序については、既述のように『逢原』が最後で、その前段階の作業として『雕題』、さらには同『畧』の執筆があったが、書・詩『畧』の末に収められ、各々に関する履軒の独自の見解がまとめられている「雕題附言」の成立時期の特定は難しい。たとえば、『尚書雕題』の頭注には「附言」の説と深く関連する文言がまま見られ、これのみから判断すれば、『雕題』の頭注は「附言」の前提的書入れであったとしてもできよう。<sup>6)</sup>しかし頭注群のなかには「これについては「附言」をみよ」との注もある。<sup>7)</sup>これは履軒が『畧』ならびに「附言」をまとめる段階で『雕題』に戻って付した頭注であるとの見方もできようが、「附言」の少なくとも或る部分に関しては『雕題』と同時に考案されていた、或はその要諦がすでに考えられていたとすることもできよう。

今ひとつ注意したいのは、『尚書雕題』が蔡沈(字一仲黙、一一六七—一二三〇)『書經集傳』に書入れを施すもの

元々清の『尚書』研究と十八世紀日本儒者の『尚書』原典批判

であること。『集傳』は後出の「偽書」とされる諸編にも分け隔てなく注を付すものであり、この『尚書雕題』と「偽古」箇所を徹底的糾弾を展開する「雕題附言」において呈出される認識との間には隔たりがあり、今後、懷徳堂文庫蔵の『伏生尚書』、「偽書目録」ではじまり「偽書終」で終わり、後出箇所のみを分出して「自抄並注解」を施す同文庫蔵『梅賾古文尚書』なども勘案しながらのこれらの作成開始・終了時期の特定が必要であろう。<sup>8)</sup>

また、履軒の『尚書』研究にはほかに、「堯典」「皐陶謨」の本文に注解を付した「典謨接」がある。これは『書』典・謨編の経文を朱字で記し、その前後に同サイズの黒字の語を補って解釈を付すもので、懷徳堂文庫蔵（現大坂大学附属図書館蔵）の『七經雕題畧』（日本中井積徳撰手稿本水哉館遺書）の易三巻の末に付されており、安永二年（一七七三）の跋がある。<sup>9)</sup>

本稿では、『雕題畧』『書』ならびに「雕題附言」については東京大学駒場図書館所蔵本（旧第一高等学校所蔵、桑名文庫、白河文庫の印あり）を懷徳堂文庫本と校合の上利用、『夏書逢原』は懷徳堂文庫本を利用、さらに同文庫蔵『伏生尚書』『梅賾古文尚書』を閲読、履軒の尚書研究を辿った。本稿ではまず、(1) 十八世紀日本における『尚書』研究について、当時の日本儒者が入手し得た宋々明の諸書も踏まえながらの整理を試みる。その上で、(2) 履軒『雕題』、同『畧』、『逢原』に引かれる宋々元の『尚書』研究諸書を勘案しながら、履軒が『尚書』を研究するにあたって依拠し得た書物群を特定し、また彼の私塾であった水哉館の蔵書群の『書』関連諸書も検討する。その上で、(3) 「雕題附言」(書)に展開される彼の原典批判自体を検討する。

(a) 十八世紀初頭までの日本の『尚書』研究と宋・元・明の『尚書』研究

履軒は、東晋以降通行の『尚書』に混在する伏生「今文」尚書部分を除き、「孔氏真古文」とされるものも含めずべてを「偽書」と断定、これは十八世紀後半日本における原典批判の水準の一例を呈示する。<sup>10</sup> たとえば、十八世紀前半ではあるが、詩・書をとりわけ重視した荻生徂徠（字一茂卿、一六六六—一七二八）においても、「古文」の諸系統本への意識はもとより、今／古文の相違への意識も希薄であり、「偽古文」諸編からの引用も散見される。徂徠の絶賛する太宰春臺（字一徳夫、一六八〇—一七四七）『詩書古傳』はこの二書から他書への引用を周到に蒐集したもののだが、後に「偽書」と断定される編からの文言も分け隔てなく引いている。<sup>11</sup>

偽作箇所への疑念、或はすくなくとも「気づき」はすでに宋の朱熹『語類』の「書」、呉棫（字一才老、生没年不詳、一一二四年の進士）『書禪傳』（佚書、『朱子語類』他に多く引用）、同・呂祖謙（字一伯恭、一一三二—一一八二）『書説』、同・陳大猷（東陽の人、『宋代尚書学案』にある東斎陳氏とは別人）『書集傳或問』などにも明らかで、宋末・王柏（号一魯齋、一一九七—一二七四）『書疑』は「今文」の再検討を最初に提唱した書、元初・呉澄（字一幼清、草廬、一二四九—一三三二）『今文尚書纂言』（以下、『書纂言』）は、「偽書」の断定を試みる書である（後述<sup>12</sup>）。また同・郭守敬（字一若思、一二三二—一三二六）にも『書』の研究があるが、一六六六年生まれの徂徠、一六八〇年生まれの春臺に関する限り、これら重要な尚書研究に別段注意を払っていないようである。

これに対し、一六九四年生まれ、春臺より十四歳年少の伊藤蘭嶼（名一長堅、字一才蔵、一一七七—一七七八）による『書

元々清の『尚書』研究と十八世紀日本儒者の『尚書』原典批判

「反正」には、呉棫『書禪傳』の語、『書疑』、『書纂言』、『書反正』、さらにはこれも尚書研究の重要な書である明・梅鶯（字一致齊、生没年不詳、一五〇六—二二年の進士）『尚書考異』が引かれている。<sup>13</sup> また、長兄東涯（名一長胤、字一元藏、一六七〇—一七三六）は徂徠の四つ下、春臺の十歳年上だが、彼の『辨疑録』卷之四（寶永五年（一七〇八）には「古文尚書其書晚出（即ち東晋梅賾によるもの一筆者）。可疑者最多矣。先儒宋呉才老（棫）朱子趙南塘元呉臨川（澄）梅鶯郝敬焯有光呉延翰徐興喬等。皆言其可疑。最可信也」とある。<sup>14</sup> ここには「偽古」箇所の断定に重要な足跡を残した呉棫、朱子、呉澄、梅鶯、郝敬（字一仲興、一五五八—一六三九）らの書が縦横に引かれ、これはまた蘭嶋『書反正』「序説」にそのまま長々と書写されている。<sup>15</sup> 『書反正』の「堅（長堅—蘭嶋（筆者））也何人而敢議此。今奉承朱呉之餘論。紹續父兄之遺志。併其不當分。去後之偽誤。復伏生舊本」との言にも、十七世紀末—十八世紀初頭において伊藤家に醸成されつつあった宋—明の最先端の『尚書』研究と、それを継承発展させんとする蘭嶋の意志が読み取れる。

東涯がこれらの書をどのようなかたちで閲覧するに至ったかの特定は容易ではないが、『古義堂文庫目録』上の「東涯書誌略」「慥庵詩艸」の項にある、「通志堂經解ヲ模セシ原稿用紙ヲ用ヒ二冊ヲ合綴セシモノ、全部ヲ通ジテ元祿五年ヨリ正徳元年ニイタルヲ収ム」との文言は、彼が一六八〇年刊の同『經解』を、一六九二年を迎えるまでに既に見ていたことを示唆しよう。同『經解』の日本への載來年や特定の儒者がいつ閲覧したかの確定は困難だが、これは、『尚書全解』『書疑』『書纂言』などを収める。加え上述のごとく東涯は履軒が引いていない梅鶯、郝敬らの書にも触れているが、とりわけ梅鶯『尚書考異』は、明代までの尚書研究の重要な到達点である。

このほか播磨の出で京都にも長く定住、蓮池藩（佐賀支藩）の藩儒などをつとめ、岡島冠山などとも交流のあった

岡(または岡田)白駒(字一千里、一六九二—一七六七)には『尚書解』があり、これもさきに挙げた呉棫、朱子、呉澄、梅鷟、郝敬らの『書』研究への造詣を示す内容のものである。下郷次郎八(字一學海、一七四二—一七九〇)『尚書去病』は「呉澄尚書纂言目錄」(十一オウ)が付された、『書纂言』から多くを引く書である。<sup>19)</sup>また、赤穂藩校教授もつとめた赤松蘭室(字一大業、一七四三—一七九七)は『書疑』に訓点を付しているが、これには寛政二年(一七九〇)に湯浅常山(元禎、字一之祥、一七〇八—一八一二)の跋が付され刊行されている。<sup>20)</sup>

『尚書』研究といえば清儒の研究、とりわけ閻若璩(字一百詩、一六三六—一七〇四)『尚書古文疏證』、王鳴盛(字一鳳喈、一七二〇—一七九七)『尚書後案』、江聲(字一叔溧、一七二二—一七九九)『尚書集注音疏』が夙に著名であるが、上に略述したことを勘案すると、十八世紀日本における『尚書』研究を考えるには、宋々明までの諸々の『尚書』研究が重要な役割を果たし、とりわけ履軒においては元・呉澄『書纂言』が重要な書であったと筆者は考える。また、上に略述した事例からは、ややもすれば看過されがちなこの時代の日本における『尚書』研究の活況が看取されることも付記したい。

### (b) 宋・元・明の『尚書』研究と履軒

さて、履軒にもどるが、彼がいつ頃より「偽作」箇所に関する確信をもっていたかの特定は難しいが、前述したように『尚書雕題』は「偽古」箇所も分け隔てなく収める蔡沈『書經集傳』に注釈を付すものである。これに対し『典謨接』においては「舜典」の編首二十八字が削除され「堯典」に接続せられ、「大禹謨」は梅賾の偽作として削除され、

「皐陶謨」は「益稷」と一体のものとして考えられている。前述のとおり、これには安永二年（一七七三）の跋がある。しかれば、履軒においては既に一七七〇年代前半までに「偽古」箇所に関する一定の認識が形成されていたものといえよう。

さきに徂徠、春臺、伊藤東涯・蘭嶋兄弟における『尚書』への意識と、とくに伊藤兄弟の目にしていた文献について触れたが、翻って履軒自身は、どのような水準の尚書研究に触れていたのであらうか。まずは、『雕題畧』「書」（卷之二―一、二）に引かれている、後の「偽書」部分の特定にも重要な意味をもつ本格的な検証を行なった人物、書物を列挙すると、さきの宋・呉棫『書禪傳』、同・林之奇（字―少穎、一一二―一七六）『尚書全解』、呂祖謙『書説』、『朱子語類』「尚書」（卷七十八）、陳大猷『書集傳或問』、王柏『書疑』、郭守敬、呉澄『書纂言』、さらには清・呂治平（号―愚庵、海寧の人。書名が特定できないが恐らく『五經辨訛』の「書」）などがある。また、とくに注目に値する『書』研究を残した人物ではないが、蘇頌（字―子容、一〇二〇―一一〇一）などが『書』の天文・地理関連の記述に関連して引かれるほか、楊升菴（字―用修、一四八八―一五五九）、陳新安（字―壽翁、休寧の人）のおそらくは『書集傳纂疏』、王炎（字―晦叔、一一三八―一二二八）、呉蘇原（字―崇伯、生没年不詳、一五二一年の進士）、薛敬軒（文清、字―德温、一三八九―一四六四）、さらには蘇東坡（字―子瞻、一〇三七―一一〇一）などの名もみられる。単純に引用回数でみると、呉棫『書禪傳』、王魯齋『書疑』が多く（四回）、林之奇『尚書全解』、呉澄『書纂言』、呂治平も引かれる。

さらに履軒の『尚書』研究の基盤の特定に重要な意味をもつのが、懷徳堂文庫蔵の「中井積徳（履軒）手抄水哉館遺書『經解目錄』一卷」である。『懷徳堂文庫図書目錄』にあるように、これは『通志堂經解』の目録であるが、

この「書」の項目と『通志堂經解』の目録とは完全に一致するものである。従ってこれに手抄されているものに関しては履軒が「書」を考究するにあたってみていた可能性は極めて高い。さきに示したように、『書禪傳』『尚書全解』『朱子語類』『書疑』『書纂言』などは履軒『七經雕題畧』の「書」に傍搜博引されている。呉棫『書禪傳』は佚書なので「經解」にもないが、この書は最も早い段階で「增多之書。皆文從字順。非若伏生之書。詰曲警牙。夫四代之書。作者不一<sup>21</sup>」と、宋代に行なわれていた「尚書」が後に複製の者による付加が施されたものであることを、字・句、文体の異質性に基づいて指摘した書であり、『朱子語類』にも多くが引かれている。

『尚書全解』は後学によつて「偽古」とされる編も含め全てに周到な注を施す大部の書、『書疑』は伏生口伝の經とされるものに疑念を呈し、さらには「今文」の再検討も提言した書である。「有宋諸儒。始疑古文後出。非尽孔壁之舊。然於今文。固未有擬議也。其并今文而疑之。則自公（王魯齋―筆者）始」との納蘭成徳による序もそれを示す。『通志堂經解』はこれらを収める。

一方、『雕題畧』の「書」、その「附言」などに清儒による名だたる尚書研究が引かれることはなく、履軒の旧蔵書ならびに懷徳堂の蔵書をみても、彼がこれらを見た形跡は確認できない。<sup>25</sup> 大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』をみる限り、閻若璩『尚書古文疏證』の載来は案外遅く享和三年（一八〇三）、王鳴盛『尚書後案』は刊行（乾隆四五年（一七八〇）から十一年後の寛政三年（一七九一）である。<sup>26</sup> 両書とも履軒が晩年にみていた可能性は否定できないが、さきに触れたように彼の『典謨接』が一七七三年であることを勘案すると、彼の尚書研究の根幹の形成に寄与したものとは考えにくい。

一七三六年に山井鼎『七經孟子考文』が清にもたらされて以来、東シナ海をはさんでの書物の往来はめざましいが、

同時に、僅かな生没年や生活領域の差が、ほぼ同時代を生きた江戸儒者たちの間での「情報量」に決定的な差異をもたらしている。十八世紀末時点での邦儒による尚書研究で最も注目すべき人物の一人は大田錦城（一七六五—一八二五）である。履軒は一七三二年生まれ、錦城より三十三才年長だが没年は八年早いのみである。しかし、錦城は履軒がみていないと思われる清儒の著述物、即ち顧炎武（字—忠清、一六一三—一八二二）『日知録』、胡渭（字—拙明、一六三三—一七一一）『洪範正論』、毛奇齡（字—大可、一六二三—一七一一）『西河合集』、江聲『尚書集注音疏』、そしてさきの閻、王鳴盛の著書を、多紀家の蔵書の恩恵によりみている。<sup>27</sup>さらにはこれらの書に対する同時代的評価に關しても敏感であったのは、たとえば『西河合集』を引くにあたって全謝山（字—紹衣、一七〇五—一七五五）『經史問答』の「西河好作偽。每自捏造以欺人如此」などといった語を援引しているのに現れている。<sup>28</sup>

いうまでもなく清儒の尚書研究はその今・古、真偽を論定するにおいて決定的な意味をもつもので、とりわけ閻『疏證』が「增多」部分が東晋以降に付加されたものであることを周到に証明し、王『尚書後案』、江聲『尚書集注音疏』は『疏證』も含めた清初よりの清儒の尚書研究を集大成したものである。<sup>29</sup>『尚書後案』は、冒頭の「尚書後案。何爲作也。所以發揮鄭氏康成一家之學也」との語に示されるごとく、鄭注を軸に『尚書』を読むことを意図するものであるが、のみならず王鳴盛は、吉川幸次郎らが指摘する鄭注の特性、即ち当代（後漢）儒者の傾向の反映でもある彼の呪術的注釈、さらにはとりわけ鄭注特有の法則的・數理的解釈<sup>30</sup>を適宜取捨し、「案曰」として王注、孔伝と疏への反論・修正を施し、さらに「辨曰」として諸論の博搜に基づく持論を展開する。いうまでもなくこの書と『尚書集注音疏』、そして『疏證』は尚書研究の最重要なものである。

王鳴盛、江聲と履軒はほぼ同世代であり、履軒が『後案』『音疏』『疏證』をみていないのであれば、彼における『尚

『書』研究と清代尚書研究の達成との比較も重要な課題となる。また、履軒より一世紀以上前に生まれた閻若璩（一六三六生）は、「天下の學術は真と偽なるのみ。偽なる者苟も存すれば、則ち真なる者必ず蝕む所と為らん」と、その旺盛なる原典批判の精神を吐露する（『尚書古文疏證』第百二十二章）。履軒も実に辛辣な「偽書」批判を展開しており、この点の比較も興味深い。

さて、尚書研究における清儒の意義については既に諸研究が示すところであるが、『朱子語類』卷七十八の「尚書注并序、某疑非孔安國所作」との語に象徴されるように、「書序」ならびに孔安國「伝」、さらには注への疑義は既に宋儒によって呈されていた。とりわけ「書疑」は今文／古文の差異に着目、さらにはのちに「偽古」と断定されるに至る諸編に対し具体的に疑義を呈するもので、『書纂言』は古文尚書の「偽古」部分を「断定」した最初の書といえ、とくに彼による経文「增多」箇所二十五編が東晋梅賾による偽作であるとの指摘（呉澄『今文尚書纂言』五ウ／六ウ）、孔安國「真古文」は伝わらず、後に張覇が「偽作」したものと混同されていること（孔壁真古文書不傳。後有張覇偽作）（同、六ウ）、古經十六卷者。即張覇偽古文書二十四篇也（同、七オ）、さらに伏生から歐陽、大・小夏侯に伝わった「今文」（これ即ち「真古文」とほぼ同一なのは後に王鳴盛、大田錦城などが指摘）が漢代以降途絶えたこと（漢世大小夏侯歐陽氏所傳尚書。止有二十九篇者。廢不復行）（同、七ウ）の指摘は注目されよう。<sup>38)</sup>

さきに挙げた呉棫『書禪傳』、林之奇『尚書全解』、『朱子語類』「尚書」、王柏『書疑』も重要だが、『書纂言』によるこれらの指摘、経文も含めた偽書の「断定」は重要で、大田錦城による「尚書增多二十五篇ノ偽書タルハ（中略）元ノ呉澄力纂言ニテ刊リ去タリ」との指摘（『梧窓漫筆』後編・下、三十六ウ）が象徴的である。<sup>39)</sup> 履軒はこの書を、晩年の作である『逢原』ではなく『雕題畧』の段階で引用している。本稿では、この点に留意しながら、さらには履

軒とほぼ同時代に成立した王『尚書後案』、さらには閻『疏證』などとも比較しながら、履軒の説を検討する。

## 2. 履軒の古文経「原典」批判

### (a) 『書』の生成過程、諸系統本についての基本認識

王鳴盛と履軒は見解を同じくするところも多いが、注目すべき相違点も散在する。「尚書後辨」は『後案』の末尾に付加されたもので、「孔序」、「漢書」、「藝文志」ならびに「儒林傳」等の誤りを適宜正し、「辨曰」として展開する自説においては「偽古」箇所も忌憚なく摘発するもので、位置づけとしては履軒の『雕題畧』末尾に付された「雕題附言」がこれにあたるともいえよう。以下、この「後辨」とも比較しながら、履軒の見解をみる。

まず、履軒の『尚書』諸系統の相違に関する基本的な認識についてだが、彼は『尚書』今古文の相違、さらには現在通行の「古文尚書」が司馬遷、班固、馬融らがみた漢代のものとは異なる、東晋からのものであることを認識している。

(一又) 按。孔氏古文尚書。班馬皆言之。蓋非虛妄。但所謂古文。又與梅賾古文殊。夫史遷既問安國入其書。而其書所記録與梅賾古文。大不同。可以見已。自梅賾古文学于世。而歐陽夏侯之尚書廢矣。故堯典微子諸篇之異同。今不可考。但金縢一篇。本紀次序解說。大與梅賾殊。而班史稱史記金縢用古文之說。是不亦明證乎」(「雕題附言」、

二ウ)

(また思うに、孔安国の「古文尚書」については、班固、馬融ともども皆なこれについて語っているものであり、けつして虚妄などではない。但し所謂「古文」というものは、梅賾の(偽作した)古文とは殊なるものである。司馬遷は、彼が『史記』に「書」を引くにあたっては、安国から既に直接話を聞いているが、その記事(『史記』に引く『尚書』からの引用文)と梅賾の古文とは大いに異なるものであることから、これは歴然としている。梅賾による古文尚書が世に通行するようになってからは、歐陽、夏侯らのみでいた『尚書』は廢れてしまった。故に「堯典」や「微子」といった諸編の異同について、今日考えることは不可能である。但し「金縢」編に関しては、『史記』の次・序にあるものと梅賾のそれとは殊なる。『漢書』にある、『史記』には「金縢」の古文の説を用いたとするとところのものも、これまたその確かな証左とならう)

ただし漢代通行の古文と現行のそれとの違いは『書疑』や『書纂言』にも明言されており、従って『通志堂經解』をみていたであろう履軒におけるこれの認識は別段特記には値しない。一方、上の語には明言されていないが、「金縢」編を「偽書」とするのは管見では履軒ただ一人であり、これについては別途検証を試みたい。

つぎに履軒における諸系統本の伝承経緯に関する認識についてだが、「附言」冒頭で『史記』「儒林傳」、「漢書」「儒林傳」を引いたあと曰く、

「按尚書論古今文。莫先於史遷。而言之可據。亦莫若史遷也。史遷言伏生壁藏後亡數十篇(但し「今文二十九編」は存在し筆者)。然則孔序所云。伏生失本經而口授。及衛宏所云伏生使其女傳言教錯。皆橫加詆誣耳」(「雕題附言」、二才)

(思うに、『尚書』の古文、今文について論じたのは司馬遷が最初であり、また、その言は最も信頼するに足るも

のである。遷は伏生が〔書〕を〔壁に隠した後、そのなかの数十編を失ったことを言う。しかれば（これは、「し  
かしながら」であるのは後述）「孔序」のいうように、伏生は本経を（すべて）失い、伝承は口伝えのみによっ  
たとの説、及び衛宏が（伏生の）娘に伝えせしめたとする説は、皆なでたらめを言っているに過ぎない）

伏生からの『尚書』二十九編（履軒がこれを二十八編十偽太誓一編と認識しているのは後で触れる）伝承について  
の記述は、『史記』「儒林傳」、「漢書」「晁錯傳」、「儒林傳」、「論衡」正說編、さらには『漢書』「儒林傳」注引の衛宏  
「尚書序」ならびに「楚元王傳」に引かれる劉歆「移太常博士書」などに見られるが、ここで履軒は、『史記』の、伏  
生が「壁藏」後に書数十編を失ったものの、二十九編が残ったとの説（伏生求其書。亡数十篇。獨得二十九篇）―「列  
傳」第六十一―に鑑みながら、『孔伝』の本経がすべて失われ口授されたとする説、衛宏の口伝説をみな「横加詆誣耳」  
とする。いうまでもなく履軒が批判するのは、「濟南伏生。年過九十。失其本經。口以伝授」との「孔安國尚書序」（偽  
書）の語、ならびにその「疏」の「伏生壁内得二十九篇。而云失其本經。口以傳授者（中略）傳教既久。誦文則熟。  
至其末年。因其習誦。或亦目暗。至年九十晁錯往受之時。不執經而口授之故也」である。<sup>14</sup>

本経亡佚説は『經典釋文』にも「伏生失其本經。口誦二十九篇傳授」と記されている（卷之一）。王鳴盛は、徳明  
が梅本を「古文」とする「無識」を批判する（後辨）〔後案〕卷八、十四ウ）が、徳明が本経を「亡」としたのは  
「孔伝」を無批判にとつたためであろう。

「附言」の語に戻ると、続けて履軒は「夫伏生以尚書教授于齋魯之間。固無本經不録之理」（伏生は『尚書』をもつ  
て齋・魯の国で教えていたのだ。本経が「録（そな）わっていないなかった」との「理」があり得ようか）と述べ、「孔  
序衛宏之欺」の甚だしきが批判される（二才）。この、履軒による「本経亡佚」説の否定は重要である。即ち、履軒

がみた『尚書』研究は、既述のとおり元・呉澄『書纂言』までで、『書纂言』は「錯所不知凡十二三。略以其意屬讀而已」との「孔伝」ほかにある語をそのまま引き、さらに「夫此二十八篇。伏生口授。而晁錯以意屬讀者也」<sup>35</sup>と、今文はあくまで「口伝え」されたのみとの立場をとっている。「亡佚」説の批判はあくまで清儒の研究を俟ち、履軒の同世代の日本儒者の説にも「亡佚」説批判はみあたらない。<sup>36</sup>

さて、履軒の説を王鳴盛「後辨」と比較すると、「本経を失った」との孔伝説が誤りであるという点で履軒と王は見解の一致をみるが、逆に衛宏説については、王は是としている。「後辨」所収の「孔安國序」に、顔師古の引く衛宏「尚書序」の言も含めて曰く、

「孝文使朝（晁―筆者）錯往受伏生書。顔注引（ママ）衛宏尚書序云。伏生老不能正言。使其女傳教錯。齋人語與穎川異。錯所不知十二三。畧以意讀。宏此言是也」（二ウ―三オ）

（孝文帝は、晁錯をして伏生に『尚書』について学びに行かせた。顔師古の引く「衛宏尚書序」には、「伏生は年老いていて正言することができず、その娘をして晁錯に教えせしめたが、斉人の語と穎川の言葉には違いがあり、錯が理解できない言葉が十に二、三あったので、憶測も交えながら読んだ」とある。宏のこの言は正鵠を射ている。）

「後辨」ではこのように、伏生の年齢、斉語と穎川語との差異からよく伝わらない部分があったとする「宏此説」を「是」とするが、しかしその上で王鳴盛は、「僞孔則意謂。伏生失其本経。口以伝傳授。生縦耄。何至家無本経。僞孔特誤会衛宏之言。遂妄造此語。其實不然」<sup>37</sup>（同、三オ）と、「縦え伏生が耄いて」いたとしても、それ故「本経が亡佚」とするのは衛宏説の誤解（或は曲解）に起因する誤り、偽説の「妄造」だとしている。さらにこれは「作僞者。

特欲抑伏以自伸」ゆえであり、今文諸派を排斥すべく偽孔伝の作者が講じた策略であると、富永伸基「加上説」を彷彿させるごとく論難する（三才）。

履軒は、『書』の編数についても以下の見解を示す。

「按經二十九卷者。謂伏生書二十八篇。與僞泰誓一篇也。篇各為卷。故二十九卷也。古文經四十六卷。即孔氏家書。與伏生合有二十九篇。而憎（増―筆者）多逸書十六篇。及百篇之序者一篇。亦篇各為卷。故四十六卷也。顏師古孔穎達。皆泥梅賾之書。以此四十六卷。為五十八篇之書。謬甚」（六ウ）

（思うに、經二十九卷とは、伏生（今文尚）書二十八編に偽書「泰誓」編一編を加えたものであり、各編が各々各卷を為すので、二十九卷となる。「古文經」四十六卷とは即ち孔氏の家書であり、伏生の二十九編と合するに増多の逸書十六編、さらには「百編の序」なるもの一編があり、これらがまた各々卷を為す故に、四十六卷である。顏師古や孔穎達は、皆な梅賾の書に泥なんでしまい、その四十六卷をもつて五十八編の書としているのは大変な謬りである）

ここで履軒より三十三才下、十八世紀末日本における『尚書』研究の泰斗、大田錦城の説をみよう。錦城はまず、『史記』に引かれるのは伏生今文二十九編と安国古文三十四編からのみであると指摘する。

「遷已從安國受書。而其作史記。具載書文。然皆伏生二十九篇安國三十四篇之文耳。不載今之增多一言一句。則今之增多二十五篇。非後人僞作而何也」（『九經談』卷之七「尚書」、八才）。

（司馬遷はすでに安国に従いながら『尚書』について教授され、そして『史記』を作り、『書』の文を載せている。よつて『史記』にある）文は皆な伏生（今文）の二十九編と安国（古文）の三十四編からのものだけである。

現行の「增多」諸編からは一言もまったく引かれることはない。されば、現行「增多」二十五編が後人による偽作でないわけがない)

この編数の相違については、王鳴盛『後案』にも、「三十四篇者。即二十九篇」とあり、「安國得古文(中略)其中分盤庚太誓各爲三分。顧命爲康王之誥。故三十四也(卷之一、一才)と相違の根拠が述べられている。王はさらに、「至杜林衛宏賈逵及馬鄭。則用歐陽本」(後辨「四ウ)と、鄭玄らが用いたのは「歐陽本」系統であったと特定している。また、『後案』に先立つ彼の『十七史商榷』では、「經二十九卷。班氏自注云。大小夏侯二家。此則指伏生今文也」(卷二十二、漢書十六、一才)としており、この段階においては、王鳴盛は、歐陽生⇓大・小夏侯に伝わったものは「今文」であったと理解していたことになる。

錦城に戻るが、また曰く、

「安國之得古文。蓋多不能讀。然其三十四篇。與伏生二十九篇同。故得比較以讀之。其他二十四篇。及零碎文字。皆不明辨。故附載之耳」(『九經談』卷之七「尚書」、十ウ⇓十一才、現代語訳は省略)

また、「今文」にはない真古文十六編(逸書)に関しては、

「史記殷本紀。載湯征文五十七字。載湯誥文百二十六字。劉歆三統曆。載武成文八十二字。載伊訓文二十四字。是皆安國古文。眞增益逸書十六篇二十四篇。而其湯誥武成。與今之增多湯誥武成。迥然不同。則今之增多二十五篇。非後人偽造而何也」(同)

〔史記〕「殷本紀」には、「湯征」の文から五十七字、「湯誥」の文から百二十六字、劉歆「三統曆」、さらには「武成」の文から八十二字、「伊訓」の文から二十四字が載せられているが、これらは皆な安國の「古文」にあるも

のであり、失われた「真書」(十六編。「九共」を九編に分けると二十四編)である。しかし、『史記』に引かれるところの「湯誥」ならびに「武成」の文と、現行の「增多」編の「湯誥」「武成」の文はまったく異なるものである(迥然不同)。よって現行の「增多」二十五編が後人による「偽造」でないわけがない)

と、『史記』に引く各編の語と同じ編名の現行「增多」の語の相違から、後者が後人による偽作であることを指摘する。<sup>(47)</sup>

また、現行の(增多)「湯誓」の語は、『墨子』に引かれる辞と異なるもので、これは「安国の見ざる所」であり(九才)、同じく「泰誓」もまた然りである(同)ことを述べ、これらを根拠に、現行古文の「增多」十六編が、逸書である安国古文十六編とは異なるものと断じている。その上で、

「魏徵曰。晉世秘府所存有古文尚書經文安國真古文附眞增益者。今無有傳者」との『隋書』「經籍志」の言を引いたあと、「於是乎王肅之徒。贗造今之增多二十五篇。以廢鄭玄所傳增益二十四篇。又僞作孔傳。以破鄭玄所注矣」(同、十一才)とし、王肅を偽作者と断定、さらにそれは、鄭玄を「廢る」のが目的であったとしている。但し錦城、『梧窓漫筆』では偽作者を皇甫謐だとするに至っている(「後編」下、三十八才)のは、王鳴盛「後辨」の「僞書。非王肅作。即皇甫謐作。大約不外二人手」(『後案』卷八、十三才)との説、さらには「撰孔傳。蓋出皇甫謐」(『後案』卷一、一才)との説にのちに首肯するに至ったためとも考えられる。

さきにもたように、「齊魯の間」に「本経」が存在していたとする立場の表明においては『史記』の説を是とする履軒だが、後段では、「古文」尚書に関する限り、司馬遷も「僞書」しか見ていないとしている(五才、後述)。この点に関し、宋・王柏『書疑』は、『史記』に引かれるところの『書』には幾つかの系統のものが混在するも、伏生「今

文」のものも少なくないとする立場をとる（観史記所載。雅俚雜糅。雖多太史公妄加點竄。而伏生本語。亦不爲少（卷一、三才）。ただ、今文尚書そのものは亡佚としている（予欲獨求伏生尚書。已不可得（同、二ウ（三才））。

いわゆる「張霸百兩編本」に関しては、すでに『漢書』「儒林傳」に、これが前漢の東萊張霸による別系統のもので、取るに足らぬ拙文が混在したものと指摘がある（「世所傳百兩篇者。出東萊張霸。分析合二十九篇。以爲數十（中略）爲作首尾。凡百二篇。篇或數簡。文意淺陋」。履軒はこれを引いたあと、次のように述べる。

「按劉向所校中書。即安國所獻之古文矣。孔穎達乃謂。劉向班固之徒。不見安國古文。而以張霸之書爲古文。蓋孔穎達以梅賾之書爲真古文。遂以劉向所校中書。爲張霸之書。誣甚。孔穎達又稱。張霸之書。爲五十八篇。與儒林傳不合。亦不知何所據」（「雕題附言」、六才、現代語訳は省略）

孔穎達による、劉向、班固らのみた「古文」が実は張霸の別本であったとの批判を覆し、孔穎達こそが梅賾の偽書を「真古文」と誤解した張本人であると論難している。さらに穎達による編数の認識にも間違いがあることを指摘している。

履軒は、伏生より歐陽生、張生に伝えられ、その後兒寛、大・小夏侯など三家に伝えられた所謂「今文」尚書と「古文」の相違のみならず、「孔安國」古文、壁中本（魯恭王本）、中古文（中書）本、河間獻王本、張霸百兩編本、そして杜林漆書古文本を識別している（「雕題附言」八才、十才の図など）。

一方、諸系統本が各々特定の時代にどう認識され、また、真本がいつ、誰により偽書とされ、翻つては偽書が真本とされたかについての図式の呈示においては、十九世紀初頭の大田錦城の慧眼に一日の長があるといえよう。少し長いが、『九經談』「尚書」における彼の持論を以下に掲げる。

「賈馬鄭王。古文宗師也。後漢書三國志。皆有明文。而馬鄭王三家注。唐初猶存。隋志唐志釋文皆有之。至于唐初。以今之梅本增多及傳爲真本<sup>(マ)</sup>。而立學官。無奈三家古文儼乎存世焉。於是孔穎達作正義。以鄭氏之書爲張霸百兩僞書。徵作隋志。以三家之書爲杜林漆書僞本。陸德明作釋文。以三家之書爲伏生今文。三書皆成于同時。其言各殊。是謂後漢古文三冤矣。以假爲真。以真爲假<sup>(マ)</sup>。其勢不得不然。夫子曰(『易』繫辭下—筆者)。誣善之言。其辭游焉。唐初三子之謂乎。

杜林以漆書古文傳衛宏徐巡。見于後漢書。夫杜林漆書古文。即安國科斗古文。後漢古文。即前漢古文。本無別本。又非異學。自隋志欲排賈馬鄭王古文。而僞以漆書爲別本。名儒如王伯厚。誤取焉。近世朱彝尊排梅本增多者也。毛奇齡佞梅本增多者也。其見大殊。然爲隋志所誤。皆以賈馬鄭王之學爲漆書異學者。則一也(十二才)

既に述べたように、錦城は王肅の「贗造」(十一才)、梅賾による經文「增多」部分と「伝」の偽造を指摘するが、ここでは、『隋書經籍志』(『新』唐書藝文志)『釋文』の記述も斟酌しながら唐初期までは馬融、鄭玄の注が行なわれていたことを述べ、梅本が「真本」とされ字官に立てられたのはこの時としている。さらには孔穎達により鄭玄のものが「張霸僞書」とされ、魏徵により賈・馬・鄭・王の古文尚書の排斥が謀られるなか、彼らのものはすべて「杜林本」の「僞書」とされ、さらに『釋文』においては王肅本も含め「伏生今本」と看做され、「以假爲真。以真爲假」ごとの混沌とした状況に至ったと批判する。

さきに触れたように、錦城は主たる清代尚書研究に触れている。しかし彼は、自分の「增多」箇所の摘発について、「後数年。得清人尚書集注尚書後案。皆略得吾意者也」(十三才)と、これらはいくまで自分の独自の発見であって、王鳴盛らの知見は「吾が意を得たる者」とすら語っているのは金谷治も指摘するところである。<sup>(8)</sup>上の見立てについて

も、彼の独創か、はたまた清儒の知見の上に成り立っていたものかについては、『尚書後案』の舶来が『九經談』成立の十三年前であったこと（寛政三年（一七九一））を考えると如何とも断定し難いが、たとえばさきの錦城の「湯誥」「武成」編の異同についても、「武成」編が「建武之際」に亡佚となったのは既に閻が指摘、それを王も『尚書後案』より前の作である『十七史商榷』にて引いている（卷二十二、二才）。

(b) 「大序」の虚偽性についての基本認識

書「大序」が安国によるものではなく、魏・晋間につくられたものであることは、清儒の指摘を俟つまでもなく、既に呉才老、朱熹らによる指摘があり、「伝」についても然りである。履軒も『朱子語類』卷七十八「尚書」の語を以下のよう<sup>39</sup>に略挙する。

「朱子―筆者）又曰。書序。必不是安國做（做―筆者、下記注39参照）。漢文粗枝大葉。今書序細賦。只似六朝時文字。小序断不是孔子做（做―筆者、同上）。

又曰。書序。細弱。只是魏晉人文字。陳同父亦如此說。

又曰。尚書註并序。疑非孔安國所作。蓋文字善因。不類西漢人文章。亦非後漢之文（中略）書傳。恐是魏晉間人所作。托安國爲名」（『雕題附言』十ウ〜十一才）<sup>39</sup>

また、「大序」が後学による偽作であることは宋末の王柏『書疑』『書大序』に三つの根拠が示され、『書纂言』にても「偽作」とされる。ここでは、履軒が「大序」を偽作とする理由について、宋儒の説も念頭に、さらには錦城の

説と比較しながら考察する。

まず錦城だが、『九經談』「尚書」において、「大序」に「巫蠱事」が述べられる（『書疏』では十六才）が、同乱は征和二年（九〇BC）、つまりは安國の死（錦城は「武帝中年」と推定（七才）、実際は一四〇BCとされる）より後であり、この一点からだけでも「大序」が安國の作ではないこと明白であると論じる（『九經談』卷七、六ウ〜七オ）。孔穎達『正義』に至るまで繰り返されるこの過ちの元凶が、恭王「懷宅」と『書』の献上に関する『漢書』の説の誤謬にはじまり、とくに班固による「劉歆傳」の誤引がその主因であることを、『漢紀』、『文選』、王鳴盛「後辨」、朱彝尊『經義考』の諸説を適宜引きながら論証する。曰く、

「荀悦漢紀云。武帝末（『漢紀』ならびにそれを引く朱彝尊『經義考』「古文尚書考」では「時」―筆者）。孔安國家獻之。會巫蠱事。未列于（『漢紀』では「於」―筆者）學官。朱彝尊古文尚書考。宋版文選劉歆書云。天漢之後。孔安國（家）獻之。遭誣蠱倉卒之難。未及施行王鳴盛尚書後辨。藝文志劉歆傳誤脫一家字耳。蓋安國已死。天漢之後獻書者。安國家人也。此說自朱竹垞發之。足以證大序之偽造矣」（六ウ〜七オ）

（荀悦『漢紀』に、「武帝末年において、孔安國の家人がこれを献上したが、巫蠱の一件があったので、いまだ学官に列せられることはなかった」とある。宋版『文選』所収の「劉歆書」に、「天漢の乱の後、孔安國（の家人）がこれを献上したが、誣蠱倉卒之難に遭って施行されるには及ばなかった」とある。「漢志」に載せられている「劉歆伝」には、「家」の一字が誤って脱落している。安國はすでに没しており、「天漢之後」に『書』を献じたのは彼の末裔である。この説は朱竹垞がはじめて明らかにしたものであるが、これのみでも、「大序」が「偽造」であることを証するに十分である）

統けて、「大序云。既畢會國有誣蠱事（中略）夫誣蠱之亂征和二年也。天漢四年大始四年。然後爲征和。安國没後不知其經幾年。獻書而遭誣蠱者。安國死後家人之事也。今安國口中乍爲此言。非鬼語而何。大序僞造之述。至此昭然」（七才）とする。

錦城は、朱彝尊（字—錫鬯、号—竹垞、一六二九—一七〇九）『經義考』を手がかりに、『漢紀』と宋版『文選』所収の劉歆「移太常博士書」文言中の「家」の一字に着目、この、安國の「家人」を意味する一字が、それを引く『漢書』「藝文志」においては脱落していることを指摘、さきに触れた「誣蠱の乱」の勃発時期（「天漢」年間（一〇〇—九七BC）より後の「征和」年間（九一—八八BC））が、錦城の推測する安國の没年（前述）から遙かに隔たることをもって、安國「自身」が『書』を献じたとする「漢志」の誤謬を指摘する。

但し宋版『文選』、その六臣註版、李善注、そして「尚書後辨」所引「劉歆傳」（十九才—二十才）いずれに所収の劉歆書にもこの「家」の字はなく、よって上に引用した文の訳には括弧を付した。管見の限り唯一、『漢紀』孝成皇帝紀二卷・河平三年の記事とそれを引く朱彝尊「古文尚書考」に「家」の字をみるのみである。<sup>40</sup> また、上に指摘したように、『漢紀』と『經義考』では「献上」が「武帝「時」となっているが、錦城は「武帝「末」としている。もし『漢紀』の記述が正しく、さらに錦城の推測する安國没年（「武帝中年」）も是とすれば、安國「自身」による「献上」の可能性も残すこととなるが、やはり「誣蠱の乱」が征和二年で、それ故「未列于學官」との事実は動かないので、この可能性はないとみるべきであろう（また、朱彝尊『集外詩文』第三十九「與閻百詩論理古文尚書」にも「誣蠱の乱」に関する記述があり、「當依『漢紀』増家字為是」とある）。

ともあれ、錦城は朱竹垞の知見を勘案しながら、安國が有していた『書』の献上は彼の「家人」、末裔によるもの

であり、「安国その人」とすることの誤謬を指摘する。

そして、現在通行の大序「伝」、『孔叢子』、『孔子家語』の文との比較検討をもって、大序の「伝」、そして「大序」そのものが王肅一人による偽造であるとする。

「蓋今之大序僞傳及孔叢子家語附録。皆出於一人之手。故其事與言。往往相符。則王肅之徒僞造何疑之有。學者比校三書。則知予言之不僞矣」(『九經談』卷之七、七ウ)

(けだし現行『尚書』の「大序」と「伝」、及び『孔叢子』、『孔子家語』の「附録」は、皆な一人が書いたものである。であるからこそ、その事と言は往々にして相符合する。これ則ち王肅らによる偽造でないわけがない。学者は、これら三書を比校すれば、私の言っていることが嘘ではないのがよくわかるう)

一方、履軒は「大序」の偽作であることの根拠を二つ挙げる。まず、

「按孔子序書者。次第之謂也。雅頌各得其所之類也。非序跋之序。若夫序跋之序。孔子之時無有也。僞撰家謬爲序跋之序。詩書皆爲之序。以托名孔子。可笑之甚」(『雕題附言』、七オ)

つまり孔子の時代とそれ以前においては、「序」とは「次第の謂ひ」のことであり、今日意味するところの「序」ではないとし、さらに「大序」は『史記』の文からの剽窃をもって作られたもので、これも「大序」が安国真古文ではないことを物語るとする。曰く、

「梅賾之書叙。是剽窃(於―筆者)史記而作也。故其字句同者。不足爲疑。亦不特書。凡梅賾之書。有合于史記者。皆剽窃於史記也(中略)梅賾之書。非安國家書古文。明矣」(同、七ウ)

(梅賾による「書叙(序―筆者)」は、『史記』から剽窃して作られたものである。だからその字・句が同じであ

るのは、疑うまでもない。また、『尚書』のみならず、おおよそ、梅賾の書いたもので『史記』の文と合するものは、皆なこの書から剽窃して偽作したものである（中略）梅賾の『書』は、安国が所持していた「古文」ではないのは明らかである）

さらには、「安国作書傳。絶無左證。今梅賾書傳。其解古文與解今文處。往々矛盾。是梅賾書傳。亦不出于一手」（同、八才）とする。かく、梅賾の作った「書叙」即ち「大序」は『史記』からの剽窃であること、安国が「伝」を作った証拠など存在しないことを挙げ、これ即ち「梅賾本」と「孔安国本」が別個であることの証左であるとす。そして、「梅賾古文」中の「今文」箇所解釈と「古文」箇所のそれとがままた矛盾が多いことをもって、ギリシャ古典『ホメーロス』よろしく梅賾古文尚書の「伝」が複数の者の手によることを指摘している。

(c) 「壊宅」説と伏生「真本」の存在に関する見解―劉歆による偽作性の指摘

さて、伏生からの伝承説においては、「壁蔵」「壊宅」説の真偽、晁錯への伝承の「され方」の二点が常に問題とされてきた。これらは、漢初に伏生の「本経」を含め「真本」が存在したか否かの問題に直結するポイントとして重要である。履軒はまず、恭王による壊宅説は『史記』にはなかった（「史遷之時。本無是語（壊宅―筆者）」（「雕題附言」四ウ）とし、これはまさしく劉歆による捏造であり、それが『漢書』にも無批判に引かれているとしている。「雕題附言」に曰く、

「夫恭王懷宅之事。創見於劉歆移書。而班史取之又載之藝文。遂槽（懷德堂版は「増」―筆者）入魯恭王傳。蓋

史遷之時。本無是語也。治古文者之誇言也」(四ウ)

(恭王が孔子宅を壊し、<sup>へ</sup>て『書』『論語』などの書物を得)たとの説は、劉歆の「移太常博士書」において創<sup>は</sup>めてみえる。班固はこれをそのまま『漢書』『芸文志』に載せ、遂に「魯恭王伝」にも採入されるに至った。ただし『史記』にはもともとこのような語は存在しない。古文を治める者の誇言といえよう)

たしかに『史記』『儒林傳』には「秦時焚書。伏生壁藏之。其後兵大起流亡。漢定。伏生求其書。亡數十篇。獨得二十九篇」とあるのみ(儒林列傳第六十一)で、恭王による「懷宅」があったとの語はない。これに対し『漢書』『儒林傳』には「恭王懷宅」のことが述べられており、これを十八世紀後半の段階で「劉歆において創めて見ゆ」と断定しているのは管見の限り履軒よりほかにない。

そして実はこの劉歆、「本経亡佚」説の端緒となることも「移書」に書いている。履軒と王鳴盛が「本経を失った」とする「孔伝」の誤りを指摘するのは「2-1(a)」で述べた。『漢書』『楚元王傳』に引かれる「移書讓太常博士」をみると、「孝文皇帝。始使掌故晁錯。從伏生受尚書。尚書初出於屋壁。朽折散絶。今其書見在。時師伝讀而已」<sup>(4)</sup>と、「屋壁より出」た『尚書』は朽ち折れて散絶の憂き目にあい、これは「時師」が「伝読するのみ」であったと明言されている。<sup>(5)</sup>履軒は劉歆が「本経亡佚」説まで偽作したとは語っていないが、「偽作」の端緒を新しく後漢の歆に求めるのは、清末の康有為(字一廣廈、一八五八—一九二七)、呂思勉(字一誠之、一八八四—一九六七)といった常州学派の諸家を俟つ。とりわけ康有為『新學偽經考』において歆が徹底的に糾弾されるのだが、康は、秦の焚書や東晋における偽作よりも歆による偽作を重くみ、さらに『漢書』がこれをしばしば無批判に引くことを批判、たとえば『漢書』『律曆志』は、「漢書律曆志。全用劉歆三統曆。其引武成以逸周書考之。即世俘解也」と、そこに引かれる劉歆「三統曆」

はまさに『逸周書』『世俘解』であることなどを列挙する。<sup>48)</sup>

しかし、この清末におけるかような動向のほぼ百年前、十八世紀末日本における、履軒による劉歆を偽作者とする指摘、さらには班固によるその無批判な引用を「班固の謬、彰、明なる哉」と手厳しく批判する点は、特記に値するものといえよう。

大田錦城も壞宅説に関し持論を展開、主に「恭王伝」、王充『論衡』を引きながら、『漢書』『藝文志』の誤りを述べている。

「恭王初好治宮室。壞孔子舊宅。以廣其宮。於其壁中。得古文經傳。恭王在位二十八年。其十五年在景帝之世。

而其十三年。在武帝之世（中略）藝文志誤言。武帝末魯恭王壞孔子宅。欲廣其宮。而得古文尚書。武帝末年。距

共（恭王筆者）王之死四十年矣。四十年後壞孔子宅者。恭王之鬼乎。將再生乎。可笑之甚。特王充論衡云。孝景

帝時。魯共王壞孔子教授堂。得百篇尚書。于墻壁中。此言得之。然則藝文志武帝。景帝之誤。不辨而明」（『九經

談』卷之七「尚書」、五ウゝ六オ、現代語訳は省略）

「武帝末年」は恭王の死から隔たること四十年あまりであり、よって「壞宅」が武帝時に行なわれたとする『漢志』の説を、主に王充『論衡』に依りながら批判する。ただ錦城は、本経が存在したか否か、口授されるのみであったかには言及せず、劉歆の介在にも一切注意を払っていない。

つぎに、歐陽、大・小夏侯に伝えられたものと伏生が伝えたものが同じものであるとする王鳴盛『後辨』の説にもどるが、これに関しては履軒も「歐陽生親受業于伏生。而授兗寛及大小夏侯。非歐陽夏侯。徑晁錯之傳也」と、少々曖昧ながら錯経由での伝承も否定しない立場をとっている（「附言」二オゝウ）。

(d) 「古文書」の全面批判

これまで『七經雕題畧』『書』の末に付された「雕題附言」を中心に、日中の同時代の『尚書』研究との比較をしながら考察してきたが、履軒は、以下のごとく決定的な断定を行なっている。

「按安國所獻古文尚書。今無其書。然亦僞書耳。劉向劉歆司馬遷班固之所見。此僞書也。茲諸人所援引稱說。可見矣」（「雕題附言」、五才）

（思うに、安國が献上した（とされる）「古文尚書」は、今は存在しないものだが、やはりこれもまた僞書である。従つて劉向、劉歆、司馬遷、班固らの見たものも、やはり僞書である。よつて彼らの「古文尚書」からとされる）言を援引して諸人が述べるところの言説もまた然りである）

まことに大胆な指摘であるが、同時に大きな論争もよぼう。即ち、履軒は、東晋以降通行の僞書（或は偽古諸編）は勿論のこと、「孔安國」の「古文」尚書も「僞書」と断定、現行古文に混在する「今文」諸編を除き、劉向、司馬遷らがみていた「古文」も即ち贋ものであったとする。その根拠として上に引用の語のあとに、孔氏の「系譜」が不確かであり、『孝経』『孔子家語』『孔叢子』といった書の「紕繆」も既に先儒によつて指摘済みであり、『逸礼』についてもその「伝」が失われていることをいう（同、五才）。あまり確固たる根拠ともいえないが、その上で、「孔氏子孫。及齊魯鄙儒。以孔子宅爲奇貨。杜撰妄論。自托孔氏。以售其詐耳。然古文尚書。亦不得以其出於孔氏而信之」（同、五才）と、かなり手厳しい語調で「古文尚書」の信憑性の低きさまを糾弾する。

ある面においてこれは、『書纂言』の「孔壁真古文不傳」(六ウ、前出)もうけての判断でもあろうが、錦城の見解、或は康有為が「兎寛受業於安國。歐陽大小夏侯學。皆出於寛。則皆安國之傳也。司馬遷亦縱安國」とし、「則今古文實無異本矣」(『新學偽經考』卷三上、十三オウ)とすると大いに隔たる。

本稿でみたように、錦城『九經談』「尚書」も「偽作」箇所の析出を詳密な考証をもって行なうものだが、「偽作」箇所の意味合いについては、履軒と根本的なところで立場を異にする。

「古書引書之語。大抵湊集此二十五篇中善言嘉語。尽収不漏(中略)故無違於道義者。蓋其精巧。非佗偽書之比。其作者。卓然名家。非王肅爲之。則肅之徒高足者爲之耳。古尚書逸語。皆在此書。則此書。豈可廢乎。予故論增多諸篇。云其鼎則賈而其肉則美。豈不亦信乎」(『九經談』「尚書」、十オウウ、下の考察をもって現代語訳は省略)さらに続けて、

「眞僞之論與用不用殊。或曰。增多諸篇。多載嘉言。有裨補於治理。何以知其僞乎(中略)辨眞僞與論用不用殊。增多之僞可辨。而其書之用不可廢。是天下萬歲之公論也」(同、十ウ)

金谷治「日本考証学派の成立」でも言及されているが、錦城は、「道義」を教える「実用性」の側面での有用性の有無を基準に、「偽書」の全否定を忌避している。履軒との見解の相違をどう考えるべきか。

実はこれは、両者における「古書」の意味付け、価値判断の基準の差異を呈出するものである。即ち錦城は、後付けの文言であっても、「真の古文」の教説を敷衍する性質のものである限り有用であり、「偽文」は、「此の数語を用ひて以て法と為」し、「統治の補助」となり、「其の鼎は則ち賈」であっても「其の肉」は「美」とすら語る。対し履軒は、「原典がどうであったか」に殊更こだわらる。

錦城が偽書の有用な面を説くにあたつて例示するのは、「有人引古舜典云。堯曰。咨。爾舜。爲君則仁。爲臣則敬。爲父則慈。爲子則孝。誰不知其僞乎」（同、十ウ）といった「原典」の意味を敷衍する言であり、偽作箇所や偽作者の割出しとは次元の違う意味での正当化であるとの見解もあるう。しかし、これは難しい問題で、『史記』『論語』『左伝』あたりに引かれる『書』『易』などの語、とくに原典を明記しての引用とはまったく別次元のことで、錦城は上の説明を、王肅らの偽作について語るなかで弁じているのであり、この限りにおいては、かような偽作の正当化は最も忌避されるべきことではないか。新く後漢初の劉歆、或は王肅、或は東晋梅賾らの作るところのものを、「其の鼎は則ち贗」であつても「其の肉」は「美」としてしまふのは憚られよう。これと関連するが、吉川幸次郎も、「孔氏伝」は「魏晋の常識的解釈」をもつて「彼此折衷」した結果であり、また、『尚書』という書物の解釈に最も適したその時代の解釈の産物であり、ある意味でこの書は「漢儒の『尚書』研究の集大成であり」、「集注」にあたるものと位置づけている。極めて適確な「孔氏伝」の位置づけといえようが、増多諸編の扱いについては別途検討する余地があるろう。<sup>(45)</sup>

履軒にもどるが、前述したように、劉歆『移太常博士書』記載の「壁中」本、「漢志」に言及される「中古文」本も含め、「古文」に関する限り、これらは「偽書」だとする立場を表明している。張霸百兩編本の覇による「序」は「空造」（「雕題附言」、九オ）、安国が「書伝」を作したとの説は「絶無左證」（同、八オ）、これらはみな、「大抵小人之趨於利。猶蛾之趨於火」の行為であり、「僞文贗書。歷代不斷」なものであるとし、いわゆる「古文」とされるものは経文、注文とも偽物ばかりであることを筆鋒鋭く糾弾する（同、八オ）。また、孔穎達ら孔子の子孫、そして齋・魯間の「鄙儒」らが「杜撰」をなし、「妄論」を好き放題に展開するのを手厳しく断罪（同、五オ）し、前出）し、『尚

書』に關してはただ一つ、現行『尚書』に混在する伏生の「今文」のみを真としている。

総じて、「偽古」編の「断定」は元・呉澄を端緒とし、「偽古文」箇所事例の具体的な列挙をもつての断定は閻『疏證』においてであり、その後の清代諸儒もこれを基盤とする。王鳴盛『後案』も「若偽孔。則非古文。亦非今文也」と明言（『尚書後辨』十六ウ）、「偽孔本」は「東晋」に突如あらわれたもの（突出）との明・梅鷟『尚書考異』の表現も借りての見解を示すが、『史記』引用の「古文尚書」も含め「偽書」と断言するのは、履軒において特異なものといえよう。

### 小括… 忌憚なき「原典批判」——同時代の西欧、中国の文献批判と比較して

西ローマ帝国の滅亡以来ずっと長い間、西欧においてはキリスト教的な歴史哲学が支配的な力を持ち続け、近代の歴史哲学が芽吹いたのは十八世紀以降であるのは、既に和辻哲郎（一八八九—一九六〇）による指摘があり、歴史記述においても、キリスト教的世界観の枠内での「普遍史」から客観的「世界史」が台頭してきたのは、どんなに溯ってもゲッティンゲン学派のガッテラー（一七二七—一九九）<sup>45</sup>、シュレーツァー（一七三五—一八〇九）あたりが端緒であるのは岡崎勝世による指摘がある。<sup>47</sup>「事実」「史実」、或は真の意味での「原典」箇所を「客観的」「批判的」に析出し、その他の部分を「虚妄」と断定したり、特定の教義に規定されての論述を「妄論」とする批判精神に基づきながら歴史的叙述を紡ぐ作業は、ヘロドトス『歴史』の伝統を継承したビザンツの歴史家たちのような「例外」はさておき、すくなくとも十八世紀世界という時空においては、世界史上極めて「稀有」なものであることを、ここに確認し

ておきたい。

その上で、本稿にて考察した履軒、或はすこし前の伊藤蘭嶋、或は履軒の懷徳堂の先輩富永伸基（二七一五―四六）らにおける、辛辣な原典批判は、水田紀久の言葉を借りていえば、「斯道の始祖、聖人を絶対視せず、これらを、ただ後の立論者が權威と仰ぐ偶像と断じ、その超人格をも、思想発達の原則により、ひとしく相対的地位に定位し去」る知的営みであるといえよう。<sup>48</sup> 本稿で示したように、履軒は、王肅、梅賾らによる「捏造」「剽窃」「誇言」の横行、孔伝などにおける「詆誣の横加」を指摘するのみならず、前節にてみたように、蘭嶋、錦城らも言及しなかつた前漢末く新の劉歆による偽作とその班固による無批判な引用なども析出している。

履軒のこれらの営為は、単なる「漢・魏回帰」とか「漢学の復興」ではない。なにより、彼の劉歆批判は、後の康有為によるそれが多分に政治色の強かつたものであったのとは異なり、価値中立的に一切の偏りを排し、純粹に文献的に「最適」と判断された「古典」とその「原解」のみを適宜客観的に析出、吟味・考究する営みであり、これ即ちまさしく「文献批判の方法」である。

かような原典批判、それを裏支えする客観性、批判精神は、「自由な学問」といった生易しい言葉で形容されるべきものではない。それは、再び水田の言葉を借用していえば、「実証主義をもって基本的条件となす近代科学研究と等質」の学問姿勢<sup>49</sup>であり、十八世紀西欧の歴史家、そして科学者が生命を賭して獲得していった知的基盤と比肩されるべきものである。

最後に、とくに大谷敏夫、木下鉄矢、濱口富士雄、井上進、吉田純らによる、注目すべき清代の経書研究<sup>50</sup>に関し、とくに本論と関連する限りにおいて触れておきたい。大谷氏の業績はこの時代の経世論を詳述するもので、木下氏の

ものも慧眼鋭くこれを論じ、さらには音韻の学にも及ぶものであり、濱口氏の著作は音韻に関する同氏の專論を収録する。これらの書はまた、清朝考証学に底流する儒学的な形而上学、明代学問の継承の様相などにも着目、これら各々の労作の詳察は本稿の射程を遙かに超える。その中において、吉田純氏の著作は、本稿が主題とする『尚書』批判の姿勢に関することにも鋭意言及、とりわけ清代考拠家の多くにおいてみられる、いわば留保的とも形容し得る学問態度に着目、彼らにおける、極端な「弁偽」的姿勢への批判的傾向を指摘する<sup>51</sup>。吉田は、清初の顧炎武、或は本稿でしばしば言及した王鳴盛、さらには閻若璩らも含め、彼らが經書の權威の全面的な剥奪を目指したと理解するのは誤りであるとす。これら清代考拠家研究の説を十全に引照しながら、清儒の営みが単純な文献批判ではなく、高度に政治的な判断や思想的な色合いを濃厚に反映させたものでもあったとする伊東貴之の指摘も重要である<sup>52</sup>。

翻って、履軒の忌憚なき原典批判は、「総ての」經書の權威の全面否定を目的としたものであったか。彼が論・孟、そして『中庸』を重視していたのはこれまでも指摘があり、現行『尚書』の「今文」箇所を偽書としなかったことから、全面的な經書の否定が目的ではなかったことは明らかである。そもそもそれが目的なら經学の精緻な考究という営為自体が自己矛盾であったといえよう。

しかし、「真書」の確定への努力の否定、經書の「無批判な」尊崇こそ、一方では妄信、排他性、自浄作用の排除を胚胎させる要因とはなるまいか。無論、木下、伊東らがそれぞれの次元で指摘するごとくの社会Ⅱ政治的状况が無制限な原典批判を許さなかった事実は看過できず、本論冒頭にて引いた履軒『雕題畧』緒言の、「毀譽得喪を度外におき、「愛憎を新故に生ぜず」して「古經の未だ瞭かならざる」を開明する営みは、ある意味では、異なる社会Ⅱ政治的状况下にあった十八世紀日本においてのみある程度可能であったものともいえよう。

もう一点、江戸儒者における文献研究を考える上で忘れてはならないのは、まず履軒や蘭嶋らの仕事は、宋末〜元・王魯齋、同・呉草廬、明・梅鷺、郝敬らの批判的『書』研究を適宜参酌したものであったこと。そして、少しあとの錦城の研究には確実に閻若璩『尚書古文疏證』、王鳴盛『尚書後案』、江聲『尚書集注音疏』が反映されていたこと。ここに、「東アジア海域」をまたいだ「客観主義」「原典批判」の発展的継承の足跡が認められるといえよう。

\*本稿は、科学研究費補助金事業（課題名：「考証学・言語の学、そして近代知性―近代的学問の「基体」としての漢学の学問方法」〈代表：筆者、課題番号25370093〉）、東京大学東洋文化研究所個別課題「中国古代テキスト研究と西欧のフィロロギー―十八世紀日本の文献学的・書誌学的学問方法の比較研究」の研究成果の一部である。

本稿執筆の途上においては、科研費研究会合（於：東北大学）にて報告し、また、本稿を中心に据えた日本漢学の考証学的・文献学的達成についての研究がヨーロッパ日本研究協会（European Association for Japanese Studies）に採択され、二〇一四年度大会（於：スロヴェニア・リュブリカーナ大学）において報告の機会をいただいた。前者においては伊東貴之国際日本文化研究センター教授、片岡龍東北大学教授（文学部日本思想史研究室）、尾崎順一郎氏（東北大文学部中国哲学研究室）らに、後者においては P.F. Kornicki ケンブリッジ大学東アジア学部長、W.J. Boot ライデン大学名誉教授らに、多岐にわたり貴重なご教示をいただいた。ここに感謝の意を表したい。

\*\*本稿では、引用の原文（含、書名、人名）の字句が正字体の場合はそれをそのまま用い、他は原則略字体を用いた。

本稿で利用の中井履軒『尚書』関連著作・注釈書：

○『尚書雕題』（履軒自筆、七經ノ内）。蔡沈『書經集伝』に頭注を中心とする書入れを施したもので、初頁の頭注に「尚書雕題」とあり。六冊、27.5cm x 19cm、1-09-01日本SHI-C②。懷徳堂文庫蔵。成立年未詳（以下、履軒の著作については「典謨接」を除き未詳）。

○『尚書雕題畧』（履軒手稿、七經ノ内）二冊、23.0cm x 16.2cm、1-09-01日本SHI-R②。懷徳堂文庫蔵。第二冊の末に「雕題附言」あり。

○『尚書雕題畧』（七經雕題畧二ノ一〜二）二冊、22.3cm x 16.2cm、旧一高文庫（現東京大学附属駒場図書館）蔵。「第一高等学校図書館」の印のほか、「桑名文庫」「白河文庫」の印あり。第二冊の末に「雕題附言」あり。

○『尚書雕題附言』（「雕題附言」のみ独立の冊）一冊、24.0cm x 16.0cm。「雕題附言」との内題の次行に「尚書」とある以外は、懷徳堂文庫蔵、一高文庫蔵『雕題畧』「書」の第二冊末にあるものと全く同じ。懷徳堂文庫蔵。

○「典謨接」履軒手稿『七經雕題畧』一「易」三巻の末に収める。『懷徳堂文庫目録』には「尚書二巻付典謨接一卷」とあるが、実際には「易」の第三巻の末に収める。24.0cm x 16.1cm。1-09-01日本SHI-R①。懷徳堂文庫蔵。安永二年（一七七三）。

○『梅嶺古文尚書』（中井積徳〈履軒〉自抄並傍注水哉館遺書）一卷。1-03-00正文BAI。懷徳堂文庫蔵。

○『尚書』（中井積徳〈履軒〉訓点安永年間刊本皇都松梅軒蔵版水哉館遺書）一卷。懷徳堂文庫蔵。

○『伏生尚書』（中井積徳〈履軒〉自抄並考定・訓点水哉館遺書）一卷。1-03-00前漢FUK。懷徳堂文庫蔵。

その他の日本儒者による『尚書』関連著作・注釈書…

○伊藤蘭嶼『書反正』二冊、「序説」「堯典」のみ。本稿では享保二十年（一七三五）版の蘭嶼手稿本（懷徳堂文庫蔵）を、明和二年（一七六五）の平安書林等版刊本（早稲田大学古典籍資料室蔵）と交合の上利用。尚、享保二十年写本と明和二年版の双方に「序説」があるが、前者巻之一巻首にある「書反正序」（「序説」巻の「書反正序説」とは別）が後者にはない。

○大田錦城『九經談』十卷（四冊）。文化元年（一八〇四）の須原屋茂兵衛等版の刊本と、秋田屋多右衛門等版（著者蔵）とを交合の上利用。

○同『梧窓漫筆』前・後編上下（四冊）。玉巖堂（和泉屋金右衛門梓）刊本（著者蔵）を利用。

○同『梅本增多原』四冊。写本、東京大学東洋文化研究所図書室蔵、国会図書館古典籍資料室蔵のものを利用。

○同『壁經辨正』三冊。写本、東京大学総合図書館蔵のものを利用。

○岡白駒『尚書解』一冊。享保二十年（一七三五）版（懷徳堂文庫蔵）刊本を寶暦二年（一七六二）版（早稲田大学古典籍資料室蔵）刊本と交合の上利用。

○下郷次郎八（學海）『尚書去病』一冊。安永四年（一七七六）写本（懷徳堂文庫蔵）を利用。

○赤松蘭室（訓点、序）『書疑』三冊。平安書林等版本、明和二年（一七六五）、早稲田大学古典籍資料室蔵。

1 『七經雕題畧』緒言。書誌情報は上記参照。武内義雄「懷徳堂と大坂の儒学」（『武内義雄全集』第十卷〈角川書店、一九八四年〉）、三五四頁に引用。

2 同。

3 金谷治「疑古の歴史―元・明」(『集刊東洋学』第六九卷(一九九三年五月)、中国文史哲研究会)。のち『金谷治中国思想論集』下巻「批判主義的学問観の形成」(平河出版社、一九九七年)所収。引用の文言は後者の七五頁。

4 これに関しては『懷德』所収の湯浅邦弘、陶徳民らによる研究論文をはじめ、すでに多くの研究がある。

5 武内、前掲「懷德堂と大坂の儒学」。

6 たとえば『雕題』十ウの頭注にある「劉向劉歆班固之徒所見。與司馬遷所見同。蓋安國家書十六篇古文是也。與梅賾之古文。張霸之百兩異。而其書今亡」は、本稿第二節でも引用する「附言」六オの「按劉向所校中書。即安國所獻之古文矣。孔穎達乃謂。劉向班固之徒。不見安國古文。而以張霸之書爲古文。蓋孔穎達以梅賾之書爲真古文。遂以劉向所校中書。爲張霸之書。誣甚。孔穎達又稱。張霸之書。爲五十八篇。與儒林傳不合。亦不知何所據」(六オ)の「原案」といえるものであり、『雕題』十一オ頭注の「伏生書。無伊訓畢命。乃疑口受屬讀者非」との文言の、「本経」が伏生による伝授の際に存在していたか否かに関すること、「附言」二オの「夫伏生以尚書教授于齋魯之間。固無本経不録之理」とし、「然則孔序所云。伏生失本経而口授。及衛宏所云伏生使其女傳言教錯。皆横加誣誣耳」との説、即ち「本経」は「亡佚」とする「孔序」、衛宏の説の「欺」の甚だしきことを批判すると関連する。「雕題」十オの「安國作伝。絶無左證」との文言も「安國作書傳。絶無左證。今梅賾書傳。其解古文與解今文處。往々矛盾。是梅賾書傳。亦不出一手」との「附言」に発展的に活かされている。

7 たとえば『雕題』七オ頭注。

8 これら履軒の諸書の書誌情報については上記参照。

9 同上。

10 詳細は本稿第2節以降にて考察。

11 たとえば『辨道』第四条の「伏羲神農黃帝。亦聖人也。其所作爲。猶且止於利用厚生之道」との語の「利用厚生」、第五条

元々清の『尚書』研究と十八世紀日本儒者の『尚書』原典批判

の「乃聖乃文」との語は「偽書」とされる「大禹謨」の語であり、「辨名」に「書曰」として引かれる語は、上巻にあるものは「堯典」(四ウ)、「皐陶謨」(八ウ、十七オ、二十八ウ)等「真書」とされる編からの引用が多いが、「咸有一德」「說命」編あたりの文言も散見される。また、「書」に限らず「孔安国注」の引用がめだつ。春臺『詩書古伝』は諸々の書に引用される「偽古」諸編の文言も分け隔てなく含める。

12 本稿では、『朱子語類』は大全和刻本(万暦三十二年刊本の翻刻の寛文八年版、第五冊に卷七十八「尚書」を収める)、『尚書全解』『書說』『書集伝或問』『書纂言』各々の書は『通志堂經解』所収版、『書疑』は『通志堂經解』所収版に加え、前掲の赤松蘭室が訓点を施した和刻本をあわせ用いた。

13 但し前掲の平安書林版刊本、懷徳堂文庫蔵刊本とも「堯典」までを収めるのみで、これ以降の諸編については未読。

14 関儀一郎編『日本儒林叢書』第十一卷所収の享保十九年(二七三四)刻本。同卷「例言」に、自序に「寶永五年(二七〇八)に稿本成り、享保十七年に刪定追補」したとあり。

15 同右『日本儒林叢書』第十一卷所収「辨疑録」、八一―八三頁。蘭嶼、前掲「書反正」七オ―十一ウに引く。但し「辨疑録」に引く郝敬の語は引かず。

16 同右「書反正」、十一ウ―十二オ。

17 天理図書館編(天理大学出版部、一九五六年)。

18 書誌情報は上記参照。

19 同上。

20 注12参照。

21 この語は『朱子語類』「尚書」(卷七十八)にあり、履軒「附言」十一オ―ウにも引く。尚、馬端臨『文獻通考』では、「增多之書」ではなく、「安國增多之書」とされている。これを是とすれば、「詰曲警牙」な「今文」諸編のみならず、「文従字順」

な諸編も含めすべて孔安國古文であることとなり、東晉以降通行のものも含めすべて「真書」としてのこととなる。馬端臨の父馬廷鸞は林之奇『尚書全解』も引くが、この書も、前述したように、「偽古」箇所も分け隔てなく注釈を付すものである。『文献通考』はこれを継承したものであろう。尚、『文献通考』における「安國」の語の所在については、東北大学大学院文学研究科中国哲学研究室の尾崎順一郎氏にご指摘いただいた。氏には他にもご批評をいただいております、ここに感謝の意を表したい。また、古文の「真贋」の問題とは別に、文体の異質性指摘の端緒はいうまでもなく韓愈『進學解』である。

22 但し王柏の主張には多分に主観的判断が含まれるのは、金谷、前掲「疑古の歴史―元・明」にも指摘があり（同書一二「書」を以て伝わり書を以て晦矣―王柏」、筆者も同感である。一方、野村茂夫は、『書疑』こそが古文の「経」本文の批判の端緒であるとする。野村「疑」偽古文尚書」考」上（『愛知教育大学研究報告』三四（一九八五年二月）、三七頁。青木洋司「宋代における『尚書』解釈の基礎的研究」（明德出版社、二〇一五年二月）は、この時期の『尚書』理解の様相を的確に呈示する。

23 「伏生之所有。恐孔壁亦未必尽存。若以有無互相較數。密意所増者。未必果二十五篇也」（『書疑』「書大序」）。

24 『書疑』「王魯齊書疑序」。

25 例えば懷徳堂文庫に『尚書後案』があるが、これは皇清経解版であり、しかも昭和二六年に同文庫に寄贈されたものである。

26 関西大学東西学術研究所、一九六七年。

27 金谷治「日本考証学の成立―大田錦城」（源了閣（編著）『江戸後期の比較文化研究』（べりかん社、一九九〇年）、四九―五〇頁）。

28 大田錦城『九經談』卷之七「書」、五ウ。

29 清儒の『尚書』研究、とりわけ『疏證』については野村茂夫「疑」偽古文尚書」考」のとくに「中」（『愛知教育大学研究報告』三五（一九八六年二月））に詳しい。『尚書古文疏證』は『皇清経解續篇』所収版（二八八八年）、『尚書後案』は乾隆四五年（一七八〇）の禮堂藏版（早稲田大学中央図書館蔵）、『尚書集注音疏』は『皇清経解』所収版（一八二九年）を利用。

元々清の『尚書』研究と十八世紀日本儒者の『尚書』原典批判

- 30 吉川「尚書孔氏伝解題」(『東方学報京都』第十一冊第一分冊(一九四〇年四月))。のち『吉川幸次郎全集』第七卷(筑摩書房、一九六八年)所収、引用箇所は『全集』の二七二―七六頁。
- 31 この典型例としては、吉川前掲書の二七三―七五頁にも引かれる「益稷」編の「萬邦黎猷。共惟帝臣」に関する鄭注である。吉川も指摘することく、「孔氏伝」が「万国の賢者たち」との穏当な解釈を与えるのに対し、鄭注は実際に「一万の国」が存在したことを証明するための煩雑極まる説明を与える。『尚書後案』はほぼ毎条「鄭曰」として鄭注を付し、他の注を付し、その上で案語を付す体裁を保つが、「益稷」編のこの条のごとくの、ほとんど「聖書」の叙述を無批判に前提し、もって世界人口を一兆三千億としたり、アダムの寿命を九三〇歳としていた「普遍的」聖書解釈を彷彿させるような鄭注は殆どとらない。
- 32 金谷、前掲「疑古の歴史―元・明」にも王柏、呉澄が宋末―元初の博学の風潮、古書の真偽への意識を象徴する儒者として取り上げられている。
- 33 近年の研究では金谷治、野村茂夫が「尚書の古文経そのものを偽とした」最初の人物として呉澄を挙げる。金谷、同上書の一とくに第十四節。野村、前掲「疑古古文尚書」考(上)、三七頁。
- 34 『尚書正義』(阮元『十三經註疏附校勘記』、書疏一、十ウ、十一オ)。
- 35 前掲『書纂言』(『通志堂經解』所収版)、二ウ。
- 36 拙論「久米邦武と『尚書』研究―清代考証学と宋・元・明経学の兼採の様相」(『東洋文化』〈無窮会東洋文化研究所紀要〉第九集(二〇一二年十一月))。
- 37 この点に関しては王鳴盛『尚書後案』「後辨」にも「孔壁真古文。原有武成篇。至建武之際亡」(八十四オ。同様の言が八十四ウにも)とある。
- 38 金谷、前掲「日本考証学の成立―大田錦城」。
- 39 原文は以下のとおり。

「書序恐不是孔安國做。漢文麤枝大葉。今書序細賦。只似六朝時文字。小序斷不是孔子做。義剛。論孔序。漢人文字也不喚做好。卻是麤枝大葉。書序細弱。只是魏晉人文字。陳同父亦如此說」

「尚書注并序。某疑非孔安國所作。蓋文字善困。不類西漢人文章。亦非後漢之文。」

「尚書孔安國傳。此恐是魏晉間人所作。托安國為名」

40 『漢紀』は中華書局版『兩漢紀』評点本（二〇〇二年）を利用。朱彝尊『經義考』卷七十六（尚書十四卷）、九ウに『漢紀』のこの語が引かれ、つづけて「則知安國已逝。而其家猷之」、「脱去家字爾」とされている。尚、『漢紀』における「家」の字の所在は前出の尾崎氏にご教示いただいた。感謝したい。

41 「移書讓太常博士」は『文選』「上書類」にも収める。

42 ちなみに『文選』「六臣注」のこの語の注をみても、「翰曰。古書以竹簡為用。繩連之。故云。朽折散絶」と孔疏を敷衍するのみである。

43 『新學偽經考』全十四卷、卷三上、十四ウ（康氏萬木草堂版、光緒十七年（一八九一）刊（著者蔵））。

44 ちなみにこの例えをもつての「偽古」箇所の評価は、若き日の著作である『梅本增多原』にもあり、また『悟窓漫筆』後編下、三十九ウにもその旨が記されている。

45 吉川、前掲「尚書孔氏伝解題」とくに『全集』第七卷の二七二—七三、二七五、二七六頁。ただ、朱子の「後漢人作孔叢子者。好作偽書」、或はまた「孔安國解經。最亂道」との指摘（『朱子語類』卷七十八「尚書」）も注目に値しよう。かような批判もまた朱子或は南宋という時代における旺盛な經学的批判精神の反映とのみかたもあるうが、やはり、新、後漢、さらには魏・晋、唐初の『尚書』增多諸編をめぐる諸々のことは安易に肯定されるべきものとは考え難い。

46 和辻『近代哲学の先駆者』、他。『和辻哲郎全集』第六卷（岩波書店、一九六二年）。

47 岡崎『キリスト教的的世界史から科学的世界史へ… ドイツ啓蒙主義歴史学研究』（勁草書房、二〇〇〇年）、とくに第二編「ガッ

元々清の『尚書』研究と十八世紀日本儒者の『尚書』原典批判

テラーと啓蒙主義歴史学の形成」

48 水田「富永仲基と山片蟠桃―その懷徳堂との関係など」(日本思想大系『富永仲基・山片蟠桃』岩波書店、一九七三年)、六  
六四頁。六四六―四七、六七二―七二頁ほかにも同様の主張あり。

49 同上、六五〇頁。

50 大谷敏夫『清代政治思想史研究』(汲古書院、一九九二)、同『清代の政治と文化』(朋友書店、二〇〇二)。濱口富士雄『清  
代考據學の思想史的研究』(国書刊行会、一九九四)。木下鉄矢『清朝考証学』とその時代』(創文社・中国学芸叢書、一九九六)。  
吉田純『清朝考証学の群像』(創文社、二〇〇七)、同『尚書古文疏證』とその時代』(『日本中国学会報』四〇、一九八八)。  
井上進『明清學術變遷史―出版と伝統學術の臨界点』(平凡社、二〇一一)。

51 とくに吉田、前掲『尚書古文疏證』とその時代』。

52 伊東貴之『清朝考証学の再考のために―中国・清代における『尚書』をめぐる文献批判とその位相、あるいは、伝統と近代、  
日本との比較の視点から』(笠谷和比古編著『徳川社会と日本の近代化』(思文閣、二〇一五年三月刊行予定))。

53 履軒がとりわけ『中庸』を最重視し、さらにこれをもって忠・孝を宣揚、誠によるこれら二倫の実行を標榜していたことにつ  
いては武内、前掲『懷徳堂と大坂の儒学』(『武内義雄全集』第十卷)、三五五―五八頁にも指摘がある。

# Nakai Riken (1732-1817)'s study of *Shangshu* and the Sung-Qing scholarship on the subject: A comparative study

by TAKEMURA Eiji

Nakai Riken was a well-known eighteenth-century Japanese Confucian belonging to the Kaitokudō, and is usually considered a '*shushigakusha*'. However, inadequate attention has so far been paid by intellectual historians to his scholarly excellence in evidential and exegetical elements. His study of *Shangshu* in particular exhibits expertise in textual criticism, and, despite the fact that his access to Chinese *Shu* studies was limited in his time to the ones up to the Yuan period, Riken demonstrates a notable quality and originality.

Riken's work shows both striking parallels with the views of Qing evidential scholars on *Shangshu* that were unknown to Riken, and elements that are quite original to the scholarship of his age in East Asia. He deals not only with the problems concerning its Old and New Texts, but also with discrepancies among the variants of the Old Texts, and with the distinction between the 'original' and 'forged' chapters and the evidential grounds that support the argument. He denounces the so-called 'Great Introduction' (大序 or 孔序) as a text that was 'added' deliberately after the Eastern Jin (東晉) era by Mei Ze (梅賾). He also denies the claims that the text of *Shangshu* was unreadable when it was found in the wall of Confucius's residence, and survived only in oral tradition. Most importantly, he denounced Liu Xin (劉歆) of the Former Han as the 'fabricator' of these forged stories, and of Ban Gu (班固)'s erroneous and careless quoting of these Liu Xin's stories (「夫恭王懷宅之事。創見於劉歆移書。而班史取之又載之藝文」). As Riken points out, it was this 「劉歆移書」 that started these false stories concerning the transmission of the *Shu* texts at its early stage, that resulted in the spread of the incorrect message that the text was transmitted only orally.